

## 迷宮にて

裕川 涼

### ● PHASE 1 I S O本部・南部のオフィス

二月四日。

国際科学技術庁本部のオフィスで、南部は郵便物のチェックをしていた。報告書やらダイレクトメールの山に混じって、梱包材付きの封筒に入ったものがあった。南部は送り状を見た。差出人の名前はない。伝票からみて、アメガポリス市内のどこかから投函されたものらしかった。手に取ると、さほど重くはない。本やカタログの類ではなさそうだ。

I S Oに届いた荷物は、一旦保安部が受け取り、それぞれの部や課に配送される前に、全て、爆発物のチェックに回されている。南部の部屋に届いたということは、さしあたり、開けても爆発する危険だけは無いということである。

南部は、ハサミで封を切った。赤い包装紙に包まれ

た箱が入っていた。包装紙の中身は、どこにでも売っているような白い箱だった。箱の中には、幅が約一〇センチほどのハート型のチョコレイトが一つ入っていて、表面にホワイトチョコのレリーフで「Just for You, Happy Valentine's Day!」と描かれていた。さらに、全く同じフレーズが印刷されている以外に、何一つ書かれていないメッセージカードが添えられている。た。

「何だこれは？」

南部は呟き、受話器をとり、保安部直通のボタンを押した。

「南部だ。頼みたい事があるので二、三人来てくれ。ついでに秘書課から誰か一人連れてきてほしい」

程なく、セキュリティ三人と、普段南部宛の郵便物の整理をしている秘書課のバーネットが南部のオフィスにやつてきた。

「まあ、バレンタインにしては早いですわね、南部博士。一体どなたからですか？」

バーネットは、南部の机の上のチョコレイトを目ざとく見つけた。

「差出人は不明。これを私に送った意図も不明だ」

「この時期に男性にチョコレイトを贈る意図なんて、考えるまでもないと思いますけど」

「普通の状況ならな」

答えた南部は、自分が失敗したことに気付いた。その表情を見て取ったのか、セキュリティが口を開こうとした。

「解っている。済まない、不用意に素手で触つたのは私のミスだ。このところ、基地ではなくオフィスの方に詰めていて、少し気が緩んだらしい」

セキュリティに何か言われる前に、南部は失敗を認めた。

爆発の危険が無くても、BCテロを仕掛けられる可能性は常にあった。差出人不明の荷物を開けるのであれば、素手で触るのは危険で、最低でもサージカルマスクと手袋くらいは着用すべきだし、普段ならそうしていた。

「バーネット、これを見てどう思う？」

「ありふれたバレンタインの贈り物に見えますけど」

「普通は十四日に贈るものではないのか？」

「でも、郵送の場合ですと、一日二日早めになることは別におかしくありませんわ」

「まだ十日前だ」

「確かに気が早いですわね。でも、これが、普通にバレンタインに告白するつもりの人からだすると、多分、それなりに本気ですわよ」

「何？」

「だって、これ、手作りチョコですわよ。このタイプのチョコレート型、前に見かけたことがあります」

南部は、机の引き出しを開け、カメラを取り出し、チョコレートとカードと包装紙の写真を撮った。別の引き出しを開け、検査用の使い捨て手袋を取り出して嵌めると、同じ引き出しに入れてあったチャック付きのビニール袋を取り出して、チョコレートを箱ごと入れて閉じた。包装紙とカードもそれぞれ別のビニール袋に入れた。

「包装紙とカードの由来を調べてくれ。どこのメーカーのものかとか、どこで売っているのかということを知りたい。チョコレートは箱ごとISOの分析室に回して薬物と毒物のチェックだ。大至急やるように伝えて欲しい。それから、調べが終わったら、カードやチョコレートは私の所に戻して欲しい」

## ● PHASE 2 | ISO本部・南部のオフィス

翌日の午後、調査結果を報告するために、セキュリティ達は再び南部のオフィスを訪れた。

「チョコレートの分析結果です」

セキュリティの一人が、分厚いレポートを南部に手

渡した。

「毒物や薬物の類は、特に何も出なかったようです。ごく普通のミルクチョコレートとホワイトチョコレートで、融点は高めのものだと」

「そうか」

南部はレポートを一通り見た。最初に南部が必要だと考えていた項目は全て網羅されていた。

「もつと詳しく調べれば、チョコレートの製造メーカーまでたどれるようですが、どうしましょう？」

「わかったところで、出回っている品だということになりそうだが、一応やるように伝えてくれ」

南部は、目で別のセキュリティに発言を促した。

「包装紙はありふれたものでした。この時期に洋菓子を買っている店なら、どこでも備えている包装紙です。市内の店を三軒回りましたが、三軒ともこれと同じものを置いてました。ただ、カードの方は、今は同じ物が出ていないそうです」

「どういうことだ？」

「カードを作っていた会社が四年前に倒産しています。また、このカードは、手作りチョコレートのためのキットと一緒に販売されていたそうです。その会社はこれ以外にも、バースデーカードなどをいろいろ作っていたそうで、一時期は、出回っている品数が

減ったそうです。間もなく、別の会社が種類を増やして対応しようですが」

南部は、袋に入ったままのカードを見つめた。言われてみれば、確かに、紙の端の方が僅かに古びていた。詳しく調べようと、ルーペを取り出した時、部屋の扉が勢いよく開いて、バーネットが走り込んできた。

「一体どうしたのだね？」

「あの、南部博士。これが……」

バーネットは、南部が昨日受け取ったのと同じ、梱包材入りの封筒を手にしていった。南部はバーネットから手渡しされた封筒の裏を見た。差出人の名前はない。今度は手袋を着用して開封した。昨日分析に回すことになったのとそっくり同じ包装紙で包まれた箱が入っていた。包装紙を外すと、白い箱の中に、「Just for You, Happy Valentine's Day!」と印刷されたカードと、同じフレーズがホワイトチョコレートで刻まれたハート型のチョコレートが入っていた。

「昨日受け取ったのと同じものだな。相変わらずカードには何のメッセージも書かれていない」

南部は、机の上のスイッチを押して、部屋の窓のシャッターを閉めた。引き出しから小さな懐中電灯を取り出した。部屋の照明を消し、ライトをつけた。紫色の暗い光が放たれた。

「紫外線を出すブラックライトだ」

漂白剤を使ったセキュリティのシャツや、バーネットの上着が白っぽく光って浮かび上がった。南部は、カードをライトにかざした。特に異常はない。

「あぶり出しか薬品処理か、そのままでは見えない方法で何か書かれているのかと思ったが、そうでもないらしいな」

南部は、ライトを消して、再び窓のシャッターを開けた。

チョコレイトに描かれたレリーフ状の文字と、カードに印刷された文字のフォントは、サイズが違うが同じだった。

「ミズ・バーネット、手作りチョコレイトのための道具というのは、どんなものなのかね？」

「一番簡単なものとすと、チョコレイトを流しこむ樹脂製の型ですわね。博士宛に送られてきた物は、メツセージ部分も一緒に作られた型を使つたんでしよう。まず、文字の部分にだけホワイトチョコレイトを流しこんで、固まった後、残りのハート型の部分に普通のチョコレイトを入れて、冷ましてから取り出すんです。チョコレイトは湯煎にして溶かせばいいので、普通の鍋やカップを準備するだけで作れますわ」

「つまり、誰でも簡単にできるということか」

「ええ。二、三回も練習すれば充分でしょう。複雑なものになると、中にいろいろ入れたり、トッピングしたり、そもそもチョコレイトではなくて、チョコレイトキーやクッキーを作るセットになっていたりするのですけれど」

南部は、昨日と同じように、チョコレイトとメツセージカードをそれぞれ別のビニール袋に入れて封をした。

「分析に回しますか？」

セキュリティの一人が、チョコレイトを手にとつた。

「頼む。おそらく、何も出ないだろうとは思うが」

### ● PHASE 3 IISO本部・南部のオフィス

最初に差出人不明のチョコレイトが南部宛に届いてから、同じものが毎日一個ずつ送られ続けて、既に一週間が経っていた。南部は、その都度チョコレイトを分析に回したが、何も異常なものとは出てこなかった。五回連続で何も出なかった時点で、南部は、分析を依頼するのを止めた。マイクログラム以下の量で人一人を殺せる毒物にも心当たりはあったが、南部暗殺が目的ならば、差出人不明のあからさまに怪しい

チョコレートを南部が食べることで毒殺を成功させるなどという楽観的な方法は選ばないだろう。

念のため続行した分析結果から、チョコレートのメーカーはわかったが、アメガポリスのどこの店でも手作りのお菓子の材料として販売されている、ごくありふれたものだった。

直近の二日間に届いたチョコレイトと、一週間分のメッセージカードを机の上に置いたまま、南部は考え込んでいた。

「どこかで見たような気もするが……」

ISOでも毎年この時期は、チョコレイトのやりとりが行われていた。アメガポリスの街中でも、店頭チョコレイトが並ぶので、普通に暮らしていれば、問題のチョコレイトと似たような、メッセージ付きのハート型のチョコレイトを大量に目にするようになる。

ドアのノックの音と共に、秘書課のバーネットが入ってきた。手には、すっかり見慣れた封筒を持っていた。

「南部博士、どうやらこれで八個目ですわ」

「またか……。一体どういうつもりなんだ？」

南部は溜息をついた。

「また、つて……。実は秘書課では話題になってます

わよ。どうやら、今年は南部博士を熱烈に思っている誰かが居るらしいつて」

「思っているのは確かだろうが、誰が何を思っているかが問題だ。それがわからないと、私とて動きようがない」

「バレンタインデー当日まで、気を持たせようという意図じゃないんですか」

「だとしたら、少なくとも相手は私のことを知らないし、私のおかれている状況も何一つわかっていない」

南部は呟き、立ち上がって窓の外を見た。

南部のオフィスは、白亜のISO本部ビルの最上階に近いところにある。窓からは、アメガポリスの高層ビル群が見渡せた。

「ギャラクターと戦っている最中ではあるし、私に對する暗殺が試みられたことも一度や二度ではない。差出人不明で送られてきたものを、私が口にするはずなど無い。こんな送り方をしたら、むしろ警戒すると考えるのが普通だろう。実際、チョコレイトの分析のために、ISOの分析チームに余分な仕事をさせることになった」

南部は振り向いて、バーネットの方を見た。

「念のために訊くが、この手のいたずらをしそうな人物に心当たりはあるか」

バーネットは首を振った。

南部は再び机の前に座った。

「いつそ、チョコレートから毒物でも出てくれば、殺人未遂事件として通報もできるし、そうなれば警察が動けるのだが、無害なチョコレートのしか来ないのでは何の事件にもならない」

今日届いた分を開封しながら、南部は眉間に皺をよせた。

「まるで、一服盛られたがっているような台詞ですね」

「冗談じゃない」

箱を取り出し、相変わらず同じ型で作ったらしい手作りチョコレートを見た後、メッセーじカードを取り出した南部は、その手を止めた。

カードの真ん中に、定規を当てて書いたような文字で一言だけ書かれていた。

—— 思い出したか？

## ● PHASE 4 — ISO本部・資料室

南部は、自身が関わっていた過去のプロジェクトについて調べるために、ISOの資料室に籠もりきりに

なっていた。

チョコレートの送り主は、南部が何かを思い出すことを期待している。しかし、チョコレートやメッセーじカードをいくら眺めても、南部は何も思い出せなかった。それならば、過去の記録を調べるしかない。女性関係については身に覚えが全く無かったから、何かあるとしたら仕事の方に違いない。カードが製造中止になったのが四年前だとすると、送り主は少なくともそれ以前に手に入れたカードを使っていることになる。バレンタイン用のチョコレートを使得ってメッセーじが送られてきたということは、南部に思い出させたい何かは、バレンタイン・デーの前後に起きたということになる。

南部は、四年前の二月からさかのぼって、毎年二月に何をしていたか、データバンクから記録を呼び出した。

四年前のバレンタイン・デーは通常業務で、会議をいくつかこなした後は定時に帰宅していた。五年前は、隣の市の工業団地が発生させた大規模な公害の対処にあたっていた。六年前は、マントル計画の調査のために潜水艇で海溝に潜っていた。七年前は、インフルエンザに雇ってユートランドの別荘で休んでいた。八年前は、某大学に集中講義のために呼ばれてい

た……。

既に記憶が定かではなかったが、どの年のバレンタインデーも、それなりに義理チョコのやりとりはあったような気がする。しかし、その後特別に何かがあったこともないし、口説かれた覚えも恨まれた覚えもない。第一、五年以上前のバレンタインデーでやりとりがあったとしても、その後、数年間何のアクションもなく、突然今年になつて何かが始まるということ自体が想定しがたい。

「通常業務を除外すると、公害の対処と海溝の調査と集中講義だが……」

暗い部屋で、次々に記録を表示するディスプレイの明かりが南部を照らしていた。

「私自身が勝手に動いたのは公害の対処だったな」

隣の市にできた工業団地の経営者が変わつてから、廃液や廃棄物の処理が違法に行われている、という匿名の通報があった。何度か立ち入り検査をしても特に異常が見られなかったが、その工場が勝手に排水を捨てているとの内部告発があった川の下流では、魚の大量死が起きていたし、海岸でも生態系が変わつたり、何種類もの生物が死滅したりといったことが起きた。南部は、臨時の調査チームを立ち上げ、自らも工場に潜入し、違法な処理をしている現場を押しさえた

後、国連軍と警察を突入させて工場を閉鎖したのだ。経営者と、ISOから派遣されていたにもかかわらず立ち入り検査を誤魔化すことに荷担したライデン博士は、裁判の結果服役することになった。何も知らされず、あるいは半ば脅されて違法な処理を行っていた末端の従業員達は、そのほとんどがISOが紹介した再就職先に転職していった。

南部は、端末の電源を落として立ち上がった。隣の市の工業団地に何かあったのだとしたら、一度見ておく必要がある。記録によれば、現在も、ISOが閉鎖したままになつていた。南部は、工業団地入り口の鍵を借りるために、保安部へと向かった。

## ● PHASE 5 ISO本部

バレンタイン・デー当日。

前日、大型のシヨルダーバッグを持参するようにとバーネットにしつこく言われていた南部は、その意味を、出勤してから知ることになった。

朝一番に郵便物を届けに来たついでに、ラッピンダされたチョコレットを差し出したのはバーネットだった。その後、午前中に一回ある休憩時間にコーヒーを飲んでいた南部は、数人の秘書課の女性達から

チョココレートの包みを貰うことになった。打ち合わせを兼ねた昼食の後、食堂で飲み物を買っていたら、秘書課だけではなく、分析や研究グループの女性達からも、半ばオフイシャル、半ば熱いまなざしでチョココレートを差し出されることになった。問題は、その量だった。包みが大きいか、妙に重い。たくさんの箱を両手で抱えて落としそうになりながら自室へと向かう南部を、すれ違った職員達が笑って見送っていた。部屋に戻った南部は、チョココレートの包みの山を前にして困惑していた。

「南部博士、いらつしやいますか？」

「ミズ・バーネットか。入りたまえ」

南部の机の上を見たバーネットは、いきなり吹き出した。

「何がおかしいのかね？」

「やつぱりそうになりましたか」

「何か知っていたのかね。見たところ去年の倍はありそうなのだが」

「説明しますから、きちんとバッグに入れて持ってつて下さいね」

バーネットに言われて、南部は、箱のリボンを外して入れやすくしてから、チョココレートの箱をシヨルダーバッグに詰め込んだ。

「十日前から南部博士宛に差出人不明の手作りチョコが届いていたでしょう？ その噂が広まったので、例年、義理チョコを博士に贈っていた人達が変わなライバル意識を燃やしちゃって……普段ならそのへんでお上品な品を買って贈っていた人達まで、今年は手作りに挑戦しちゃったんです」

「一体どういう噂が拡がっているのかね？」

「今年は南部博士に本命が居るかもしれない、つて噂ですわ。しかも正体を明かさず影からそつと見守るロマンチストが」

南部は頭を抱えた。テロを警戒する南部としては、毒殺される可能性を真つ先に思いつき、どうやら違うとわかってからも、誰が何のためにチョココレートを贈ってきたのかを考え続けていた。その南部の悩みとはかけ離れた平和的な噂がISOに拡がっているとは……。

たるんでいるのはISO内部からか、と言おうとして南部は言葉飲み込んだ。何も、巨大組織であるISOの職員全員が臨戦態勢をとる必要もないだろう。大多数の人にとっては平和的な職場である方が、むしろ望ましい。

「それでこれ、今日の招待状です」

バーネットは封筒を手渡した。



「博士にチョココレートを贈った女性一同からですわ。今日の夜、スナックジュンでパーティーをやるので出席してくださいね。もちろん、チョコレート持参の上で。手作りチョコを粗末に扱ったら、後が怖いですよ。みんな、名無しの誰かに負けるのだけは許せないと思ってるみたいですし」

「……わかった」

「それから、今日の郵便物です。相変わらず例のものも来ますわ。でも、今日で最後かも」

南部は、既に見慣れた封筒を受け取った。相変わらず同じサイズ、同じ重さの箱が、同じ包装紙に包まれて入っていた。チョコレートにも、特に異常はみられなかった。南部は、メッセージカードの封筒を開けた。カードの代わりに、写真が一枚入っていた。

南部は目を見開いてその場で凍り付いた。清楚な服装と理知的な瞳、以前一度仕事をした仲間の顔がそこにあった。

「どなたのですの？」

バーネットが訊いた。

「シルビー・パンドラ博士……。しかしそんな筈は……」

「チョコレートの贈り主ですか？」

「それは有り得ない。こんないたずらをする人じゃない」

いんだ。第一、彼女には夫が居る」

五年前に隣の市の工場の内偵をすることになった時、南部が編成したチームに引き抜いた一人がパンドラ博士だった。ISOから派遣したライデン博士が工場側に寝返つたらしいという情報の裏をとるために、パンドラは調査を行った。パンドラはライデン博士の家族に接触することに成功し、見事に証拠を押さえたのだった。工場閉鎖に伴う事務作業が一段落した後、パンドラは結婚して、夫の近くの職場に転職していった。南部とはそれきり会っていない。

南部は、コートを羽織り、シオルダーバッグを抱えた。

「南部博士、どちらへ？」

「急用ができた。隣の市にあるISOが閉鎖した工場を見てくる。夜には戻る」

バーネットを部屋に置き去りにして、南部は駆けだした。

## ● PHASE 6 工業団地跡

タクシーを拾って駆けつけた隣の市の工業団地跡は静まり返っていた。一区画が塀で囲まれ、塀の上には鉄条網が設置されていた。ゲートは施錠され、IS

Oのロゴ入りの「危険、立ち入り禁止」の看板が出ていた。

南部は、借りてきた鍵で錠を開けて、中に入った。

五キロ四方はある敷地は広々としていた。五年前に閉鎖したとき、敷地内の建物の無い部分に産業廃棄物が投棄されており、その影響で、植物は枯れ果てていた。気温は氷点下で、水たまりは凍り付いていたが、廃棄物の油と溶液が混じった液が滲みだした部分は、凍らずに液体のままだった。体重をかけると、底なし沼のように地面が沈み、足がめり込みそうになった。南部は慌てて後ろに下がった。

「土壌も随分傷んでいるな……。まるで死の世界だ」  
生き物が死に絶えた土地の向こうに、今は廃墟となった工場が並んでいた。

汚染された化学物質が拡がらないように敷地の境界を地下まで封鎖するための工事は終わっているはずだった。その後、ISOの技術で汚染除去を行う計画はあったが、そちらはほとんど進んでいない。

南部は、凍っているところを選んで歩きながら、工場の建物へと向かった。懐中電灯は持つてきていたが、日没までに一通り様子を確認しておきたかった。

資料室で確認した工場の配置図を思い出しながら、南部は、工場の建物入り口を順番に確認していった。

ガラスの一部が割れているところもあったが、ほとんどは施錠されたままで、最近、誰かが錠を開けた様子もなかった。広い建物をいくつも過ぎて、南部は立ち止まった。右手に、三階建ての管理棟が見えた。南部は、借りた鍵で中に入った。

手前の部屋二つはモニターが並んでいて、奥の部屋と上の階にはコンソール付きのディスプレイが並んでいた。工場が稼働していた時は、警備員や技術者が詰めて、事故が起きないか監視していた部屋である。長く使われていなかったらしいモニターは全体に汚れ、コンソールの上にも埃が積もっていた。南部は、ブレーカーを入れた後、電源スイッチを片っ端から入れてみた。しかし、全く反応が無かった。

「監視設備は完全に止まっているということか。いや、送電が止まっているのか」

誰かが、南部が此処に来るように仕向けたのなら、その人物はどこかで南部の様子を見ているはずである。監視という目的に最も合っているのは旧モニター設備だろう、と考えたのだが、どうやら外れたらしい。南部は建物の外に出て、周囲を見渡した。

ここまで来る間に、前を通った建物は、全体の五分の一にも満たない。一応、様子は窺ってみたといえ、外から、出入り口の部分を簡単に確認しただけで

ある。中で何かが起きているのなら、本来の出入り口以外に入れそうなところが無いかまで確かめた上で、建物内部も見て回る必要がある。その作業を一人でやっていたのでは、明日の朝になっても終わりそうにない。

チョコレートを贈って南部の注意をこの場所に向けさせて、最後にパンドラ博士の写真を送ってきたということは、五年前にパンドラ博士が活動していた場所に誘っていると考えるべきだろう。この工業団地の閉鎖の件以外で、南部とパンドラと一緒に仕事をしたことは無かったのだから、他の可能性は捨てても、間違えることはないだろう。

「パンドラ博士は確かあの時……」

南部は必死で記憶を探った。ライデン博士の妹に接触したパンドラ博士は、この工場内のどこかの建物の休憩室に、妹と一緒に居たはずだった。確か、簡単な流しやコンロのある部屋だった。別の場所から潜入して証拠を押さえた南部は、外で待っていた国連軍と警察に突入を命じた後、パンドラ博士の身の安全を確保するために休憩室に向かつて……。

突然、南部は全てを思い出した。パンドラ博士とその妹は、一緒になってチョコレートを作っていた。その時に使っていた型が、この十日間、南部に贈られて

きたチョコレートを作ったものと同じだった。ホワイトチョコレートで文字を先に埋め、ハート型の部分に普通のチョコレートを流しこむ手順で作っていた。それを渡すつもりだった相手は……

——兄の仕事の関係で時々会う南部博士が独身だつて聞いて、興味を持ったみたいよ  
パンドラはそう言っていた。

「何でことだ……」

南部は呻いた。五年前は、有無を言わさぬ証拠を押さえることと、突入に際して怪我人を出さないようにすることだけで精一杯だった。工場の警備員は武装していた上、ヤクザまがいの荒っぽい連中も用心棒代わりに雇われていたから、警官隊と銃撃戦になる可能性もあったのだ。

南部の指揮で、無事に工場を制圧した後は、今度は法律家を動員してのマンパワーまかせの事務処理作業に追われた。南部には、バレンタインデーのこともチョコレートのことも頭になかった。だが、妹の側からすれば、気を許して恋心を語ったパンドラ博士は謂わば敵のスパイであり、手作りのチョコレートを渡してデートに誘おうとした南部は警官と軍を引き連れて兄を拘束した張本人ということになる。

「任務とはいえ、恨まれたか……」

南部は溜息をついたが、同時に怒りを覚え始めていた。

「こんな面倒なことをせずに、恨み言なら直接言い来ればいいのだ」

プラントのある建物をいくつか通り過ぎたその奥に、従業員もやたらに立ち入れないことになっていた建物があるはずだった。南部は、かつて、パンドラ博士の身を案じながら自らが突入した建物の前で足を止めた。外から見た限りでは、建物の中に人のいる気配はなかった。南部は、入り口のドアノブに手を掛けた。鍵はかかかっていなかった。コートの手を掛けて、南部は中へと進んだ。南部の歩く音だけが、建物の中に響いた。

原料となる試薬を保存し、製造ラインに送り込むためのタンクはそのままになっていたが、そのうちのいくつかは錆びて穴が空き、中身が床にこぼれ、床を腐食させていた。南部は、建物の中央で立ち止まって声を上げた。

「誰か居たら返事をしろ！ ライデン博士！ ここに居るんじゃないのか？ 誘い出されて来たぞ。南部だ」

南部の叫びが反響した。返事はない。代わりに、下の方で何かがぶつかる音がした。確か、五年前もパン

ドラ博士は地階に居たはずだ。南部は、工場の中央付近にある階段に向かった。鉄製の階段は相当錆びており、体重をかけるとそれだけで崩れそうに見えた。

「誰か居るのか！」

南部は叫んで、返事を待った。下からは小さなうめき声が聞こえた。南部は、階段の細い手すりにつかまって下を覗いた。スーツ姿のパンドラ博士が手足を縛られ、口に何かを詰められたまま、南部に向かつて必死に首を振っていた。

「今助ける」

南部は、階段を降り始めた。その瞬間、爆発が起きた。崩れかけた階段ごと南部は一階から切り離された。時間差で工場の上部で爆発が起き、配管などを支えていた支柱がはずれ、地階の床に倒れた南部の上に一斉に落下してきた。そのうちの一本が南部の左胸を直撃した。

南部は直ぐには起き上がれなかった。息がつまり、目の前が暗くなった。痛みは不思議と感じなかったが、体が力が入らない。両手両足の指に神経を集中すると、感覚はあつた。致命的な怪我をしたわけではなさそうだ。

南部は、足で床を押し、パンドラが居た方に体をずらした。左手を動かそうとすると胸に激痛を感じた。

右手と足だけでパンドラの所までどうにか這つていき、パンドラの口を塞いでいた布を外した。

「無事か」

「それはこつちの台詞です」

即座に言い返されて、南部は苦笑した。

「……大丈夫そうだな」

南部は、右手だけでパンドラの手足を縛っていた紐を外した。パンドラは、ポケットからハンカチを取り出して、床に倒れたままの南部の顔を拭った。

「ん？ 何だ？」

「顔色が真っ青だし、ひどい冷や汗ですよ」

「そうか……。さっきの爆発の後、胸を直撃されて左の肋骨を二三本折ったかもしれない。痛みが酷くて左腕を動かせない。とにかく此処を出よう」

南部は、壁にすがって立ち上がった。地下に降りる階段はさっきの爆発で破壊されていた。他に上にある階段はない。

「階段は一つだけか」

「そのようです。五年前から……。南部博士、怪我をなさっているのなら、動き回らずに救助を待たれた方がよろしいのでは」

「残念だがその余裕はなさそうだな」

工場一階に設置された濃硫酸のタンクから下に向

かつて配管が伸びていた。地階に設置されたバルブの部分に亀裂が入り、地階の床に硫酸が流れ落ちていた。どうやら、梯子や設備の一部だけをきっちり破壊するように爆薬が設置されていたらしかった。起爆スイッチは、階段にあつたのだろう。

「タンクにどれだけ残っているかは知らんが、一晩もここに居たら硫酸のプールに浸かることになる。工場を停止させた時、危険な試薬は抜いておけと言ったはずだが、ISOの怠慢だな」

「そうとは限りません。仕組まれたものかも。南部博士、とりあえずバルブを閉じてみましょう。漏れているのがおさまるかもしれません」

「待て！」

南部はパンドラを止めた。

「良く見たまえ。バルブに何か仕掛けられている」

明らかに、本来なら必要無いはずの線がバルブの内部に向かって延びていた。バルブ本体とは溶接されているように見えた。

「何でしょう、これは……」

「見たところ新しいな。埃も積もっていない。何かは私にもわからないが、階段や設備の一部をピンポイントで爆破した奴が仕掛けたものだとすると、迂闊に触るべきではないだろう」

「じゃあ、どうするんです」

「別の方法でいくしかない。穴を塞ごう」

南部は後ろを振り返った。ガラス貼りの試葉棚が並んでいた。

「化学実験室だったのか、ここは？」

「本格的なものじゃないですけど……。ただ、流しやコンロがあったので、途中から休憩室に転用されていたみたいです」

試葉棚の扉には、鍵が掛かっていて開かなかった。南部は、肩からかけたままにしていたショルダーバッグを置き、コートを丸めて右手に巻いた。そのまま思い切り戸棚のガラスを殴りつけた。ガラスは粉碎されたが、同時に衝撃が怪我をした左胸に伝わった。

「うあつ……!!」

悲鳴を上げて南部は試葉棚に寄りかかった。背中を丸めて、痛みがおさまるのを待った。さらにもう一度、別のガラス窓を砕いて叫ぶ羽目になった。

「い、痛い……!!」

「南部博士、無茶しないでください」

南部は座り込んで、苦痛に顔を歪めた。額から汗がしたたり落ちた。暫くそのまま呼吸を整えてから、ゆっくり立ち上がり、扉の枠に残っているガラスを引き抜いて床に捨てた。

「まずこれだ」

南部は、プラスチックの試葉の瓶を手にして、パンドラに向かつて振って見せた。

「グルコースと、それからマルトースだ。硫酸と反応すれば水ができて、純炭素が残る。漏れている場所に振りかけよう」

「南部博士、私が……」

「背の高さからいって、私がやった方がうまく行く。ただ、左手に力を入れられないんだ。蓋を開けてくれ」

南部は、パンドラが蓋をあけたグルコースのボトルを受け取り、漏れ出しているバルブの上から振りかけた。白い粉末は見る間に黒く変色して膨らんだ。

「さっきのガラスの破片を持ってきてくれ」

南部は、ガラス板にグルコースを盛って、硫酸が漏れている部分の下から押しつけた。途中でグルコースが無くなり、マルトースに変えて、漏れている部分の管の周囲に押しつけた。膨らんだ炭素がバルブの周囲に付着し、硫酸の漏れが止まった。

「これで時間が稼げる。何があったか話してくれないか」

パンドラが通勤途中に脅されて監禁されたのは三

日前で、工場に連れ込まれたのは十四日の早朝だった。南部の予想通り、ライデン博士の仕業だった。

「では、ライデン博士は、もう出所しているのか」

南部の問いに、バンドラは頷いた。その後、バンドラに促されて、南部は、この十日間の出来事と、なぜ此処に来たかを話した。

「脅迫めいたものが何も無かったため、警察に届けることができなかつた。結局私は一人でここに来てしまった。今にして思えば、それが狙いだつたのかもしれない」

「私もそう思いますわ、南部博士」

「一思いに殺すつもりなら、階段に仕掛ける爆薬の量を増やしておけば良かったのだ。わざわざこの場所に二人まとめて落とし込んだ上で、じっくり酸で溶かして殺そうとは、私達は余程恨みをつつたらしいな。しかし、私がチョコレートの件を無視したり、あるいは気付かなかつたりしたらどうするつもりだつたんだろう」

「その場合は、私だけがここで殺されて、それを後から南部博士が知ることにあります。それでも良かったのではないでしょう。気付かなかつたという後悔をさせることならできますし」

逆恨みとはいえ随分歪んだ奴だと思つたが、そこで

南部は考えるのをやめた。

「いつ、また硫酸が漏れ始めるかわからない。犯人をとやかく言う前に、脱出するか救助を呼ぶかする方法を考えないと」

「外へは連絡できないのですか？」

南部は、上着の左内ポケットを探った。普段、忍者隊を呼び出すために使っている通信機を引っ張り出した。通信機は真ん中で折れた上、内部の基盤も砕けていた。南部は、部屋の隅の流しのついた机の上に壊れた通信機を投げ出した。

「これをポケットに入れていたおかげで、落ちてきたパイプに胸を貫かれるのは免れたのだが、ここまです壊れてしまつては私にも直せん。連絡の方法はない。踏み台や梯子を作ろうにも、その材料は無いし、この部屋は天井が高いからとても届かないだろうな」

金属製のパイプは何本か転がっていたが、接続して伸ばす方法は無さそうだった。階段の手すりなども、さっきの爆発でほとんど無くなつていた。

「救助は期待できるんですか」

「秘書の一人に、此処に来ることは言つてある。夜に会う予定だから、その時までには私が行かなければ、連絡はするだろう。いずれにしても日が暮れてからになる」

あたりは暗くなり始めていた。南部は、床に置いたシオルダーバッグを手を取った。流しのある台の上において、中のチョココレートを取り出し、さらに懐中電灯も取り出した。

「調理器具もそのまま残っていると好都合だな」

南部は、錆びたキッチンナイフを手にした。

「何とかして、我々がここに居ることを知らせる方法を考えないと、救助が来たところで時間を浪費するだけだろう」

南部は上を向いた。工場の高い屋根があった。

「あの屋根を撃ち抜いて信号弾でも上げるしかないの  
でしようけど……」

「私もそう思ったよ。ところでパンドラ博士、固体ロケットの作り方を知っているかね？」

「専門外ですけど、酸化剤と燃料を混ぜたものをエンジン内部に詰めて点火、でしたわよね。でもそれをどうやって？」

「酸化剤はここにある」

南部は、薬品棚から過塩素酸ナトリウムの瓶を二本取り出した。

「そして燃料はこれ。チョココレートだ」

南部は、今日もらったチョココレートを取り出し、流

し台の上で細かく切り刻んだ。過塩素酸ナトリウムをまぜて、さらによくかき混ぜた。パンドラがアルミのパイプの一方の端を潰して閉じ、開いている側から出来上がった粉末を入れ、長い箸で押し固めた。

「安定板がないと真つ直ぐ飛ばない。強度は必要無いから、アルミホイールでもプラスチック板でも材料は何でもいい、羽根を作って取り付けてくれ」

南部に言われて、パンドラは、コンロの周りを覆っていた古びたアルミシートを切り、金属パイプに取り付けた。

「次は発射台だ……」

南部は、懐中電灯であたりを照らした。排水管用の樹脂パイプの切れ端があった。

「こいつで垂直に立てて点火すればいい。熱でやられるだろうが、一、二度使えれば充分だ」

即席のロケット二本が完成したときには、工場内は既に真つ暗になっていた。

「これでいい。後は救助を……」

南部はパンドラの方を向いた。パンドラは、流し台の脇にゆつくりと座り込んだ。

「どうしたんだ？」

「済みません南部博士……」

南部は、パンドラの手をとった。熱い。



「熱があるのか。随分寒かったからな」

南部は、コートの埃を払ってからパンドラに着せ、並んで座った。

「頑張れ、チャンスを待つんだ」

パンドラに語りかけた南部は、左の肺に違和感を覚えて咳き込んだ。点火に備えて懐中電灯は消してあったから、見ることはできなかったが、明らかに血の味だった。動き回っている間に肺を傷つけたらしい。

——怪我人と病人のコンビじゃどうにもならんな。この気温で一晩このままだと、正直、危ないかもしれない。

「南部博士、五年前にこの部屋で……」

パンドラが呟いた。

「無理に喋らない方がいい」

「話していた方が気が紛れるから。さつき、チョコレートから燃料を作ったでしょう？ 同じ場所で、五年前に、ライデン博士の妹さんと一緒にチョコレートを作っていたのを思い出したわ」

「私宛だったのだろう？ 此処に来る途中でそこまでは思い出した」

「手作りの手伝いをして、固まるのを待っていたら、南部博士がISOの保安部の人達を引き連れて、血相

変えて踏み込んで来たんですよ。武装は解除した、君たちは包囲されている、抵抗は無意味だ、おとなしく投降しろ、って。科学者の台詞とも思えなかった」

「犠牲は出したくなかったからな。君の安全を確保できた時点で、私はそのまま引き上げた」

「結局ライデン博士はその場で逮捕され、妹さんの方も事情を訊かれることになって、チョコレートどころではなくなったわ」

「事務処理が終わった後、チームは解散し、私はマントル計画室長の職務に戻った。この場所の再生計画までは立案したが、進んでいないようだな。報復が始まったのは、ライデン博士が動けるようになったからだろうが、それにしても回りくどいやり方だ。私を恨むのなら仕方がないが、もつと直接伝えに来ればいいものを……」

「直接伝えるのは無理かもしれないわね」

「どういう事だ？」

「妹さん、病気で亡くなったから」

「何だと？」

「だから、妹さんの分まで、何の恨みなのかを南部博士に思い出させたかったんじゃないかしら、ライデン博士は。逆恨みに変わりはないのだけれど」

「それは……何とも気の毒だな」

遠くからヘリの音が近付いてきた。

『こちらISO保安部です。南部博士、聞こえたら応答してください』

スピーカーで呼ぶ声が響いた。

「そろそろやるぞ。辛いだろが、筒を真上に向けて支えてくれ」

パンドラが両手で筒を持ったのを見て、南部は、ロケットにライターの火を近づけた。激しく燃料が燃え出し、即席のロケットは工場の屋根をぶち抜いて飛び出していった。

「見えたかな？」

南部は眩き、二発目のロケットを真上に向けた。同じように筒をかぶせて点火した。今度は真上には飛ばなかったが、それでも何とか屋根を突き抜けた。

『信号確認』

スピーカーからの応答の後、十分と経たないうちに、工場の扉が開いた。

「こつちだ。引っ張り上げてくれ」

南部は叫んだ。

## ● PHASE 7 ユートランドシティ

パンドラ博士を病院に搬送させた後、南部は別のへ

リでユートランドシティに戻った。上着のポケットに入れておいた招待状によれば、パーティーはまだ終わっていない筈だった。近くのヘリポートに強引に着陸を命じ、南部はスナックジュンに向かった。

右手でドアに触れ、体重をかけて何とかドアを開けた。ジュンと甚平がびつくりして南部の方を見た。秘書課の女性達も一斉に南部の方を見て、黙ってしまった。

南部は、自分に注目している女性達を見て、それから自分の姿を見た。

髪は乱れ、工場の床を這い回ったために、薄いブルーの上着もズボンも、泥と油にまみれていた。その上、硫酸の飛沫を浴びたために、ズボンや上着にいくつも穴があいていた。咳き込んだ時に吐いた血が上着に飛び散っている上に、拭った手も血で汚れている……ということ、口の周りも血まみれに違いなかった。

「遅れて済まない。これには複雑な事情と深い訳が……ミズ・バーネット、通報は君が？」

顔を引きつけてバーネットが頷いた。

「そうか、ありがとう。無事に助け出された。ついでにこの十日、手作りチョコレットを送りつけてきた奴の件も解決した。しかしどうやら、パーティーに参加

する格好では無くなってるようだ。……何せ急いだもので、着替える余裕も無かったので失礼」

南部は会場を見回した。

「ところで、その……今日戴いたチョコレートだが、食わずに全部使ってしまった」

食わずに使う、という状況は、秘書達の想像を超えていた。南部はさらに続けた。

「しかしそのチョコレートのおかげで助かった。今日チョコレートをくれた人達は、私の命の恩人だ。本当に感謝している」

普通、バレンタインデーにチョコレートを渡した場合、期待するのはデートの誘いかホワイトデーのお返しかであって、命の恩人呼ばわりされることではない。南部の言葉は、秘書の女性達の想定外も甚だしかった。何と返事をしたものかと迷っている秘書達の前で、南部は深々と頭を下げ、そのまま床に倒れ込んだ。

「な、南部博士ーっ！」

「救急車を早く！」

一斉に上がった声を聞きながら、南部は意識を失った。

南部が、左腕と胸を固定された不自由な体で何とか

出勤出来るようになったのはその三日後だった。既に、チョコレート騒ぎの顛末は秘書課にも、そしてISO中にも伝わっていた。回復したパンドラ博士の証言で、ライデン博士は再び逮捕された。ぼろぼろの姿になってまで律儀にチョコレートの札を言いに来たことは秘書課の女性達に評価されたが、同時に、やはり南部は別世界の住人だったということも再確認されたのだった。

## あとがき（ネタバレ注意）

わざわざバレンタイン・デーのフィクにする必要があるのか？　とも思っただけけど、南部博士にチョコレートをそれなりの量持たせておくことがストーリー展開上の鍵になるので、とりあえずやってみました。

適当な配役を思いつかなかったので、ガツチャマン2で秘書になるパンドラ博士に登場してもらおうことにしました。

何せ、十四日になってから「まづい何もしてないや」と気づき、十四日の朝というか昼前くらいから書き始めて、十五日になってから夜が明ける前には何とか終わったという突貫工事フィクでした。そんなわけで、一晩寝てから細かいところをあれこれ訂正することに。

## 元ネタ&amp;ネタバレ集

特にありません。

二〇一〇年 二月十四日 ver.1

二〇一〇年 二月十五日 ver.1.1

二〇一〇年 二月二十一日 ver.1.2

初代の本部ビルの場合が間違っていたということでもないミスが。てつきりユートランドにあると思っていたら、七九話のナレーション「アメリカ国が誇る巨大都市アメガポリス。その都市のほぼ中央に、国際科学技術庁の本部がある」。九四話で竜が健、ジュン、甚平に見送られて列車に乗るシーンでのアナウンス「ポートランド經由アメガポリス行き列車は間もなく発車いたします」。諸君の住居がユートランドだとすると、列車は、ユートランド↓ポートランド↓アメガポリス（本部）、の経路で走っていることになる。ということと修正。

二〇一〇年 八月三十日 ver.1.3

裕川 涼